

教室の外の学習環境のデザインに対して教師ができること

角南 北斗^{*1}

Email: hello@shokuto.com

*1: フリーランス (Webデザイナー)

© Key Words 教室外学習, 学習デザイン, 教材開発

1. 学習ツールの充実という良い流れ

近年、ウェブサービスやスマートフォン用アプリの利用は一般的なものとなり、それらを媒体とする学習教材・学習ツールも様々なものが登場してきている。これまで、ともすれば「教室に通えない人の学習方法」という、ネガティブなイメージを持たれがちだった独習も、今はこうしたツールのおかげで「コストを抑えつつ自身の都合にも合わせられる学習方法」として捉えられるようになってきている。発表者はこれまで日本語教育の分野に長く関わってきたが、日本語学校などの教育機関に通わずに日本語を上達させた学習者の話は、世界のあちこちから聞く。オンラインで見られる日本語のアニメ、あるいはYouTuberによる番組など、日本語コンテンツに手軽に触れられるようになったのも大きいだろう。

2. 学習の選択肢以外に必要な3つの要素

ただし、これまでウェブ教材をいくつか作ってきた発表者の経験から言えるのは、学習方法の選択肢の充実は重要であるものの、それだけでは学習者のサポートとして不十分であることも多い、ということである。その理由として、本稿では以下の3つを挙げる。

1つ目は、学習者が自身の学習を管理することの難しさである。様々な学習手段や学習スタイルから自分に合ったものを選び、目標を立てモチベーションを維持する。継続して学び続けるには重要なことであるが、実行するのは容易ではない。教室に通う学習者であれば、授業に出席することを半ば強制的に続けることで、学習のリズムも保たれる。担当教師から学習状況の説明を求められたり、学習のアドバイスをもらったりすることもあるだろう。そうした制約や支援者のいない環境では、学びの自由こそあれ、小さなつまづきが挫折

につながる可能性も高くなる。教室外での学習に成功している学習者は、学習意欲に加えて、自身に学習管理のスキルが備わっていることが多いというのが発表者の見方である。

2つ目は、選択肢の存在を知る機会の問題である。発表者は現場において学習者を対象に教材紹介を行なうことも多いが、すでに世の中に便利なウェブサイトやアプリがあるにも関わらず、それを知らない学習者に多く出会う。授業担当者がITに関心がない、あるいは苦手意識を持っている場合、教師自身がそうしたツールに関する知識を十分に持たないため、学習者に紹介することもない。学習者がみな、日ごろからツールについて情報収集をしていたり、SNSなどで学習方法について話したりするとは限らない。自身で学習方法を意識せず教師に任せることが多い学習者であれば、担当教師がボトルネックとなる可能性があるだろう。

3つ目は、学習者の望む学習スタイルを環境が受け入れてくれるかどうかである。例えば「スマートフォンがあると遊んでしまうので、授業中は使用を一律禁止にしている」という現場教師の話はよく耳にする。これでは、学習者が「辞書はスマートフォンのアプリを使うのが自分に合っている」と考えていても、それを教室で実行することができない。教室学習には一定のルールを設ける必要があるとはいえ、学習を支援する役割を担うはずの教師が、学習者の学ぶ権利を奪う存在になってしまうというのは問題であろう。

3. 学習状況を共有するというアイデア

こうした問題には、どのような解決方法があるだろうか。ここで発表者が取り組んでいる事例を紹介したい。いま発表者は、EPA介護福祉士候補者（以下候補者）のための学習支援プロジェクトとして「かいごのご！」という語彙学習アプリを開

発している。この教材の利用対象者である候補者は、インドネシアやフィリピンなどから来日し、配属された介護施設で仕事をしながら日本語を学び、数年後の介護福祉士国家試験に合格しなければならない。介護用語は難しい漢字を使った語も多く、介護用語の習得が遅れると、試験対策はもちろん専門書を使った分野学習がスムーズに進まない。そこで、日本語教育や介護福祉の専門家が協業し、特に介護用語に焦点を当てた学習アプリの開発を進めている。

このアプリは、介護用語を検索できる辞書機能と、介護用語を反復学習できるクイズ機能を柱とするものである。クイズ機能は、提示された介護用語（日本語表記）に対する訳語（英語やインドネシア語）を4つの選択肢から選んで回答するというシンプルなものである。

こうした形式自体はよくあるものだが「候補者がクイズで学んだ結果を支援者と簡単に共有できる」というのが、他とは少し違った特徴である。ここでいう支援者とは、同じ施設で働く日本人スタッフなどを指す。施設には日本語学習に関する専門知識を持つ人がいないことが大半で、いわば「素人」が候補者の日本語学習状況を把握し、適切な支援を行なうのは難しい。そこで、候補者の日々の学習記録をわかりやすくグラフ化し、それを施設の日本人スタッフも見られるようにすることで、候補者の学習状況を把握し、必要なときに声をかけやすくする、という狙いがある。

介護現場で働きながら使う日本語学習の教材というのは、その内容もさることながら、教材のメディアも重要な要素である。先に「教室でのスマートフォンの禁止」の事例を挙げたが、介護施設ではさらにその制限が厳しいことが予想される。スマートフォンは学習のために必要なアイテムであるという理解がない現場では、候補者が周囲の目を無視して教材を使うことは難しいだろう。施設の日本人スタッフが理解し、施設の入居者も含め理解の輪を広げてもらうことが大切になる。

そのためには、この教材を学習者以外にも使ってもらふこと、関係者みんなを巻き込むことが必要ではないか。その具体的な方法として、候補者の学習記録を共有する機能を設計するというのが、この教材の特徴である。

4. 開発の展望と汎用的な知見を目指して

例に挙げた発表者のケースは介護現場で、一件特殊な環境に見えるかもしれない。だが、地域の日本語教室や小中学校の現場など、ニーズに対して教師の数や質が十分でない現場は少なくない。さらに、日本語教育に限らず教育一般で考えても、授業時間以外での学習は重要であろう。担当授業外の学習もデザインの範囲に含めるとなると、こうした学習記録の共有というアプローチは、1つの汎用的な方法となりうるのではないかと考える。

また、国家試験の合格という目標を考えた場合、もちろん語彙だけで学習の成果すべてを測るわけにはいかないだろう。理想的には、様々な学習記録を扱う総合的な教材設計をすべきだ。しかし、そうした総合的なサービスを開発するには多大なコストがかかり、規模の大きくない現場では取り組むこと自体が難しいといえる。まずは小さく部分的なところから有用性を検証し、同時に少しずつ現場の理解を得ていくことが、発表者のグループで現実的にできることだと考えている。

アプリは現在開発中で、2017年秋から試験運用を開始する予定である。運用のなかで、コンテンツが学習者のニーズに沿っているかを確認するとともに、施設関係者の認識を変えていく、信頼を得ていくために何が必要なのかを、試行錯誤しながら見つけていきたい。

加えて、広く学習デザインという観点で考えれば、これは教材開発でもあり、教師の役割を考えなおす材料にもなるだろう。今後ますます学習スタイルの多様化が進むなかで、教師に何ができるのかを考える材料として、業界に還元していきたい。

発表者について

角南 北斗（すなみ ほくと）。大阪府在住。

大阪大学大学院で日本語教育を学び、日本語教師を経てフリーランスのWebデザイナーに。日本語教育や情報教育の分野でWeb制作を行なうかたわら、大学や専門学校での授業、e-Learningプロジェクトのデザイン、研究発表などを行なう。

Portfolio: <http://sunamihokuto.com>

Blog: <http://withcomputer.jp>

Twitter: @shokuto